在という二つの「実在」と、それを実感する「我」とかかわるという新しい基本的態度・方法を確立したことを意味するのである。

そして、この基本的態度・方法の確立の上に立って碧梧桐は大正三年には季題懐疑の立場から、季題趣味が「自然の真実とは余りにかけ離れた、俳人的気味で彩られてを」り、それは「一種の奇蹟」であり「我が見る自然に何等の権威をも齎らさない」「約束的象徴」（「自然の見方」大3・3・15日～4・15日、日本及日本人）であると考え「若し大自然の現はれを主としていふならば、万有はそれ自身悉く季題なのだ」（同上）という考えに至りつく。

大正五年の万有季題論は、これを再整理したもので、「四季の変化は、地球の他転自転に原因するのであるから、実在の万有は其変化を経由せぬことは事実に於て有り得ない。」とし、「存在」のすべてが季節と何らかの意味合いで関わっているというようになるのである。

この事は別な言い方をすれば、「季感を総ての実在から直覚して、其処に詩的感激を発してゐるのが、俳人の季題感」であるということになる。つまり、直接、季節を云々しなくっても、存在を実感すれば、それ自体は季節を内包しているという現実観を抱いたということで、二つの「実在」、すなわち季節と存在という二つの実在は一つの季感をもった実在となるが故に「万有は季題」「であらねばならぬ」という万有季題論となってゆくのである。

以上、碧梧桐の「無中心論」から「万有季題論」への展開を「個我」の覚醒に焦点をあてて眺めて来たのであるが、ここで当然、碧梧桐をして「個我」に覚醒させた周辺といったものを突っ込んで考察する必要があり、それも、大正二年という時期を考えれば、中塚一碧楼、あるいは守旧派を唱えて俳壇に復帰した高浜虚子の存在を忘れることは出来ないであろう。

参考までに、「ホトトギス」に雑詠欄を復活し、十七音、五・七・五調の尊重と、季題趣味の尊重を説いた虚子の発言をとり出してみると、「『俳句はたつた十七字ですよ。』と判り切ったことを大きな声が言ひ度くなります。僅か十七字でゐて或意味を現はすといふ事は作者と読者との間に共通な或約束があるからです。」「時雨の趣味はからびた趣味、淋しい趣味……とさういふ種々の特色は動かすことの出来ぬものとして互に同一解釈の上に立つて居ればこそ、『時雨かな』とか『時雨るゝや』とか言つたので直ちに広がりもあり深さもある或連想を惹起し得るのではありませんか。然るに全然其約束を離れて『時雨かな』と言つて却つて春雨のやうな濃艶な趣味を他に伝へようとしたところで其が僅か十七字の働きでどうして成功することが出来ませうぞ。」（「俳句入門」―季題趣味の破壊は俳句の破壊―大1・12「ホトトギス」）ということになっている。

この考え方、季題は事実よりも観念的な伝承性に立脚するものといった考え方に直接対峙したのが、碧梧桐の万有季題論であったということになるのである。

現象に脅喝されたのではあるが、」「今日も尚ほ時として、この問題に触れて逡巡することがある。」（同上）と述べ、同じく波空の

銀河濃き一夜の宴にのみ侍せり

の句を挙げ、「気の利いた面白い句である。調子も張つてをる。が、この句を成す趣味の根柢は、我等の頭に余りに新らしい感じを与へない。」「クラシカルな物を幾分技巧で潤色して一転化を施した程度に過ぎない。」と批評、

舟嫌ふさまでもを別る天の川　　波空

になると、「余程クラシカルな所を脱却してをる。」「事実から出る趣味と、『天の川』の季題趣味との融合する点を感ずる働きが、クラシカルな頭では到底出来難いのである。」（同上）。

さらに、

祭主に弔詞言はざりし帰る天の川　波空

の句について、「略ぼ同一程度に新らしい感じを与へる。この方になると、『祭主に弔詞言はざりし帰る』と叙したその事実を捕へる働きまでが、クラシカルでは無いとも言へる。が、こゝに一疑問を遺すのは、この句の天の川の季題趣味と融合する点が余り緊密ではない、」「自然一句が渾然としてゐない不満足を伴なふ。」とし「今後の俳句は果して『舟嫌ふ』方面に極端に進んで、『銀河濃き』の如きは当然忘れられる運命のものであるや否や。」「新趣味に猛進せんとする人は、言下に『然り』と答ふることを躊躇しないであらう。又た予自身も『然り』と答ふる希望と勇気を存するけれども、其処に幾分の不安と鬼胎を脱することが出来ぬ」（同）と感想を素直に述べている。

これらの作品評を通していえることは、要するに碧梧桐が、実際の句作、或いは門下生の作品を通して「事実」と「季題趣味」との融合に新しさを求めることが、同時に「事実」と「季題趣味」との緊密性を稀薄にするという自己矛盾に陥ることに気づき、「無中心論」に理論的行き詰まりを感じていたことが知られるのである。

したがって、「日本俳句鈔第二集の首に」の執筆は、自らの論に「実感」という言葉を介して「個我」の観点から説き直すことによって「事実」と「季題趣味」との融合の困難さと、それを調和させてゆく新しい方法を示すことによって「無中心論」の持つ自己矛盾からの脱皮を計ったのだということができると思われる。

それでは、次にこの新方法と万有季題論との結びつきについて記してみようと思う。

碧梧桐が「無中心論」を大正二年に「覚醒的自我による動的自然描写」という言葉に置きかえたことは先に、述べたところであるが、この論の展開を整理すると、

碧梧桐は「個我」によって、無中心論における「ありのまま」を実在として実感し、さらには、これまで推移するものとして理論づけて来た「季題趣味」を季感を持った実在として実感する対象という形で把握する。そしてこの二つの「実感」が同一「我」によってなされたものであると説明することにより、「事実」と「季題趣味」との間に存在した自己矛盾を理論上解消させているのである。

このことは、碧梧桐が俳句において現実とのかかわりを季節と存

したがって、無中心論で、とりあげられた「雨の花野」の句についても「先づ従来のクラシカルな俳人的気新分を脱却した、其新たな態度に立つて、大自然との接触を保つに至つたと見たい。即ち我々の心理描写にのみ注がれてゐた眼を、一転して自然に移したのだ。さうして其処に従来夢にも想像しなかつた、新たな興味を見出したのである。」「要するに、実感を主とし、動的自然を尊重する、即ち従来の仮感的の傾向と静的自然の取扱ひを脱却した態度の動揺に起因する一光鋩に過ぎない。」「実感を主とするといふことは、各人個々の自我の尊重を意味する。自我を尊重するといふことは、又た其覚醒を意味してをる。」「我等の俳句の向上発展は、やがて覚醒した自我の向上発展である。」（「日本俳句鈔第二集の首に」日本及日本人、大2・2・1日）と説くことによって「実感」という語を媒介として「無中心論」すなわち「中心点を捨て、想化を無視する」という句作法を「覚醒的自我による動的自然描写」と言いかえたのである。

つまり、碧梧桐は「日本俳句鈔第二集の首に」で、これまでの自らの俳論を「芸術の根柢」とも言うべき「個我」という観念に立って書き改めたのである。

碧梧桐はこの「日本俳句鈔第二集の首に」を書く一か月前、先掲の、「雨の花野」の句について次のような感想を記している。

「明治四十三年の秋から冬へかけて

雨の花野来しが母屋に長居せり　響也

干足袋を入るゝ時客は酔うてあり　同

などの句が問題になつて、そを説明する為めに、日記の一節とか、談話体の句など言うて居つた時は、我々の句は立ろに斯の如き傾向に向ふべきもの、又向はねばならぬといふ風に幾分焦燥れてゐた。さうして、今日の俳句の中で、我等の希望に副ふものは其十が一もないと前途の甚しく遼遠なことを感じてゐた。」（「俳句を中心にして」日本及日本人、大2・1・1日）

さらに

「翌四十四年の夏から秋にかけて、

四囲蝉声澄めば自づと音読す　波空

夏すれば知多新四国瓜めぐり　同　」

「等の句を見た時、響きのない声が突然、自分を呼び止めるやうに思うた。それは平生の希望に一歩を進める、進め！の声でなくて、寧ろそれを一歩後へ退かしむる、廻れ右！であつた。」「我等の希望は俳句といふ立場を忘れて、余りに新らしい方面に脱線してをりはせぬか、と警告するやうな感じであつた。」「蓋し波空の句には、我等の脱却せんとあせつてゐたクラシカルな味ひが、其クラシカルな処をむき出しにしないで程よく調理せられてをると思うたからである。」「其真実の表白は、同じクラシカルな中にも、最も力強く自然の弾力を感ぜしめたであらう。」「自分はこの時、単に抽象的に、クラシカルな味ひを脱却する程度、といふことに思ひ及ばねばならなかつた。」「脱却非脱却の区画よりも、如何に加味し調理するかの程度問題であつたのではなからうか。」「一体全然クラシカルな味ひを脱却するといふことは、俳句では出来ないことなのではないか。」「波空の句によつて起つた疑問は」「過渡時代に於ける、有り勝な

そして、明治四十二年十一月碧梧桐が「日本俳句」の「柿」の句を選した折り接した

誰のことを淫らに生くと柿主が　一碧楼

柿主と先人の測量器見し　鹿語

の句に触れて、「叙情が従来の習慣に支配せられたものでなく」「今日の我等の直接経験から出発した感興、即ち実感――肉感ではない――との接触を保つてをる点」が、鹿語の句の新らしい核をなしてをるとし、一碧楼の句に対しても「最も鮮明に、我等の実感が表白されてをる。」「俳人のみの約束的に存する理想化の衣を脱いだ赤裸々の柿によつて、今日の詐らざる実感を述べたのである。」「我等の進むべき方向の大問題が、こゝに提供されてをるものゝ如く、これらの句が其の警鐘を鳴らすものと驚喜措く所を知らなかつた」と説明している。

ところが、この二句については、前年の「新傾向の変遷」（「日本及日本人」明45・1・1日）の中では、「予は殆んど驚喜した。それ迄我等の頭に訴へてゐた柿といふ季題趣味が、是等の句によつて一転化してをると思うたからである。季題趣味の推移といふことが、歴然としてこゝに証拠立てられたやうに思うた」「前年来多少の兆候のあつた新たな気運、元禄天明の俳人と異なつた態度の上に生れた句が、こゝに実現したと信じた」とし、ここでは「季題趣味の推移」という点から説明しており、「日本俳句鈔第二集の首に」で、「実感」という点に焦点をあてて説いたこととは、相違を見せている。

この「実感」という語について碧梧桐は、「実感を主として出発する場合、趣味の感受性が個々に分裂して、単に独り合点に終りはせぬか」（「日本俳句鈔第二集の首に」）ということと「日常茶飯の平板無味の事相を報告するに過ぎはせぬか、」（同上）という「二つの患ひ」があるとする人々があるが、まず第一の点については、「季題趣味を固定した狭い範囲に限らうとすれば、実感から出発した句は、兎角其の範囲を脱出したがる。」が「我々の目の前に無尽蔵の趣味を開展してをる大自然の現象から言へば、其範囲を脱出したからという て、直ちに季題趣味を失ふやうな狭いものではない。」「趣味の感納性が個々に分裂するのではない。旧習慣に支配されてをる、言はゞ旧世界に対して、新機運によつて動く、他の新世界を出現するのである。」（同上）と説き、第二の点については、「芸術の根柢ともいひ背景とも言ひ、母とも礎とも言ふべきは、人である、我である、人格である。人類の存する限り、其集団の普遍我を向上発展せしめなければならぬが為めには、其集団中の一個の我々即ち普遍我に対する個我の向上発展も亦た自然の数だ、といふやうな哲理を云々するまでもなく、苟くも永久の我を自覚した者には、人としての我を錬り我を磨く欲望の捨つべからざる者がある。実感は、其我を作る努力の一つの光りである。」（同上）と説き、実感を主とすれば、日常茶飯事の報告に終るとする患ひに反論している。

つまり、碧梧桐は、「季題趣味」は無尽蔵の大自然の中から実感で捕えるものであり、その「実感」は、芸術の根柢とも云うべき「個我」を作る「努力の一つの光」であると説くのである。

といふ字が書いてある。何心なく其二三句を読むと、皆草の芽や、木の芽を詠んでゐる。句の可否は別として、再び題の『芽』に読み返つた時、何やら腹の中へ滲み込んで行くやうな愉快さが、油然として湧いて来た。」（「此頃の出来事」海紅、大4・5）というもので碧梧桐はこれを「『芽』といふことを自然から直覚する人の衝動を考へて見ると、私自身の衝動とは大変趣を異にしてゐる。」「木とも草ともつかず、たゞ『芽』といふ衝動は殆んど無つた」（同上）とし、「『木の芽』『草の芽』と感ずるのは、『芽』と感ずるよりも一層具体的のやうであるが、其場処が局限され、」「単に『芽』と直覚するよりは、幾分の理知の働いてゐる間隙がある。」「私のやうに、俳句の季題といふことに、早くから馴らされたものは、自然の現象に生面する自己の衝動といふことよりも、俳句の季題としての自然の取扱方を先づ考へるやうになつてゐた。」「俳句の季題といふ重い衣をぬいで、」「自然に生面する人でなければ、かういふ衝動は起らないのではないか、」（同上）と述べ、さらに、「『木の芽』『草の芽』と言へば、そこに木なり草なりを、ハツキリ眼に浮ばしめるが、それが眼に浮ぶだけ、即ち官覚に訴へるだけ、其芽の内に籠る意味なり力なりの直接頭に響くものは、幾分純つて来る。」「『芽』と挙示される方が」「官覚を超越して、又た理知の判断を超越して、大自然の現はれが心頭に共鳴するやうな場合のやうに思はれる。」「それが詩の生れる真に純粋な感激的な発作ではあるまいか、」「自然の真実をつかんだ生きた詞であるが為めに、直に私の胸にも響いて来たのではないであらうか。」（「此頃の出来事」海紅、大4・5）と説明している。

この第二の体験は、先の阿賀川畔での「時雨」の体験において、「我を拡充し自己を露出して、自然の現象と融合渾一する処に季題趣味が生れる」「季題は我に在り」（「俳句に関する事ども」六、季題は我に在り、日本及日本人、大3・2・1日）とする考えをさらに押し進めて、季題を離れ、理知の判断を超越して自然を直覚的に把むこと、個人の直覚、印象そのものが真実味であると考えるに至った事情を明らかにしている。

ところで、このような考え方に至りつく以前の「無中心論」の中に含まれていた矛盾であるが、その矛盾と碧梧桐の自覚について触れておきたい。

碧梧桐は、明治四十二年の四月より以降、約二年間半、四十四年十二月までの句を「日本俳句」を主として、他に「続一日一信」等より選抜集録した『日本俳句鈔第二集』を大正二年三月に政教社より出版するが、この序文を、これより先「日本及日本人」に「日本俳句鈔第二集の首に」（大2・2・1日）と題して発表している。

その中で碧梧桐は、「無中心論」に触れて、「無中心といふ詞」は「本来双対的詞ではあるけれども昔の俳句、を有中心とする其前提からが、予の直覚的仮定である為め、双対的意味も亦た限られたものになつてを」り、「自然無中心なる単純な文字の示す意味とは、大分かけ離れた意味を現はしてをる。」「無中心といふ詞は、他に何か適当な文字を得て、之を抹殺したい。」と述べ、「『覚醒的自我による動的自然描写』とでも言ふべきであらうか。」という言葉を見せている。

日記事）といった「どん底」の形式への理解をその理念的な支えとしていることを明らかにしている。

したがって「芭蕉は我が俳句の自然主義の第一の主唱者であるとも思うた」（「新傾向句の変遷」）という言葉とともに碧梧桐がその必要性を理解したとする「個性発揮」も、要するに因襲からの脱皮ということを実現するための一つの条件として認めたのにすぎないのであって、「他」に対する「我」という「個我」の意味での自覚という点では弱いものであったと言えよう。

それでは、碧梧桐がこの「我」の意識を前面に押し出すに至る契機は何であったのか。

まず、第一の契機として考えられるものに、大正二年二月碧梧桐が越後の阿賀川の景勝を観に行き、一夜を阿賀川の鉄道の工夫小屋に過ごし、翌朝、意外に雨となった折りの体験をあげることができる。

それは、碧梧桐が、「日本海の時化る頃が来たのだ、北海のアレがもう手を出し始めたのだ、裏日本の特色ともいふべき時雨空が物を言ひかけたのだ、と何物かが囁くやうな思ひをし」て、「嘗て遭遇した北国及山陰の冬の荒れ模様を想起して、けふの時雨も、其大きな背景を持つてをる全戯曲の一齣、其一齣の中にも全戯曲の意味が生動してをる興味といふよりも、寧ろ人を脅かす驚怖に充ちた暗澹たる色彩に襲はれ」たことから、「日本海面の荒れ模様が、直ちに冬の恐ろしさを連想せしめるのみでなく、其雲のイひが只の暴風の雲でなくて、何かの禍根を包蔵する不安な心持に彩られ、其雨が只の驟雨とは別に、草木をも威赫する暗狂な音を漲らしてをるといふと、一言にして尽せば、北国の時雨趣味を発揮してをるといふとは、当時同行者の誰にも感ぜられてゐなかつた。」という考えを抱く。

この事は、碧梧桐が「自然の現象に対する各人の感想を喚ぶ程度は、決して一様では有り得ない。」ということ、つまり、各人の境遇性格経験の相違はやがて自然に対する個々別々の感想となるという事を、言いかえれば美感が個人に根ざすものであることを体験を通して把握した事情を伝えるものである。そしてこの阿賀川畔での体験から「季題趣味」というものが「一個の固形体となつて、或る限定された範囲内に存在するもの、」とすることの不合理、また「季題趣味」は「自然の現象其物が発揮してをるので、人は我を虚うして其発揮する趣味を享受せねばならぬ」という従来の認識が誤りであることを自覚することとなり、「我を拡充し自己を露出して、自然の現象と融和渾一する処に季題趣味が生れるのだ。」「寧ろ自然の現象に存する季題趣味でなくて、それと接触する我にあると言ふを至当とする。」（「俳句に関する事ども」六　季題は我に在り、日本及日本人、大3・2・1日）という季題観、言いかえれば「我を拡充し自己を露出して、自然の現象と融和渾一する処に季題趣味が生れる」（同上）とする考えを持つに至るのである。

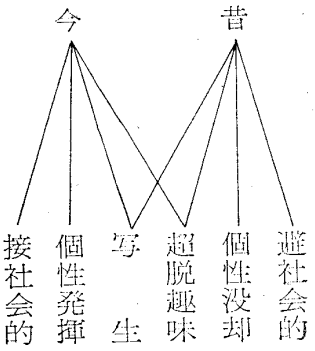
第二の契機としては、碧梧桐が一碧楼居に二三人と会した夜の出来事をあげることが出来る。その句会の席上「葉吉の原稿が次ぎに出来たので、それを取つて見ると、題を書く所に、たつた一字『芽』

労力を要した」であろうと述べ、「今日新俳句時代に養はれた季題趣味の頭を以て、我等の取扱ふ季題趣味にも制限を加へんとするのは、恐らく芭蕉時代の情態に彷彿たるものがあらう。」（「続一日一信」明43・7・2日記事、日本及日本人、明治43・8・15日）と新俳句時代に比べその季題趣味において一層推移している事実を明らかにしている。

つまり、碧梧桐の「無中心論」を支えていた季題観は、その趣味において推移するものであるという考えによって成り立っており、そこには、我と自然との交渉という形では説かれていなかった。言葉をかえて言えば、「没我」によってとらえられた自然と季題との交渉という形で論じられたものであったことがわかる。

それでは、碧梧桐が、この「我」の意識というものの必要性を理論的に認めたのはいつ頃の事であろうか。

それは「無中心論」を唱えるより前に遡ることになる。すなわち、明治四十二年十二月二十六日の俳信「続一日一信」（日本及日本人、明43・2・1日）の中で「従来の厭世的に近い避社会的態度を幾分楽天的接社会的態度――吾等の真情を詐らざる――に改むること、今一つは従来の句作法が俳諧境といふ漠然たる理想に立て籠つて、個人々々の性格を十分発揮する傾きに志して、而して俳諧境を忘れぬやうにしたい、」と述べて、自己の抱いた感じに忠実であること、個性発揮の原則を実現するための態度として、



の表をかかげ、「個性発揮」の語を用いている。

こうした考えは、「接社会的」の語とともに、当時日本を風靡した自然主義的な歩みを示すものである。事実、碧梧桐は「明治四十年からかけて四十一二年の頃は、自然主義の議論が、一般文学界に旺盛な時であ」（「新傾向の変遷」日本及日本人、明45・1・1日）り、「自然主義即本能主義又は獣欲主義の如く曲解された。が、元来の自然主義は、自然に返れ、といふ声である。人為的法則を脱して、自然の本情を見よ、といふに過ぎぬ。」「本来の自然主義は寧ろ我等を威圧した。」「俳句に所期する我等の主張が、幾分自然主義と黙契する所あるが如きを快とした。」（同上）と述べており、「個性発揮」「接社会的」の語が、こうした自然主義的雰囲気の中で用いられたものであり、更には、「中心点を捨て想化を無視する」ことを説いた「無中心論」がゴリキーの「どん底」を見て「従来の脚本の形式といふものが全然破壊されてをる。」「自然に接近し得られるだけ接近した、自然を偽らざる叙法を生命としてをる」「予が今日主張する句は」「何処にか類似の点を発見する」（「続一日一信」明43・11・14

れている。

すなわち、碧梧桐は「日本及日本人」に「俳句に関する事ども」と題して、大正二年十一月十五日号より大正四年二月十一日号まで十九回にわたって連載し、そのうちの第九回「自然の見方」（上・中・下）（大3・3・15日～4・15日）の中で「人生問題に醒めた者は、先づ『我』なる自己を認める。さうして一切の社会的因習や形式的束縛から脱せうとする。」「もつと真実な充実した人生に活きようとするのだ。」とし「其処に新たなる人生観が生ずる、新たなる運動が起る、自我覚醒は、やがて因習の世界を離れた、新たな世界の創造の原動力なのだ。」と説く。そして「季題懐疑の立場から、今日まで取扱はれてをる季題趣味なるものを見ると、自然の真実とは余りにかけ離れた、俳人的気味で彩られてをるのが、一種の奇蹟の如くにも思はれる。」「季題といふ真実よりも、それに附加せられた趣味の色彩の方が強い。それが俳人に限られた情緒感動であるといふよりも、寧ろ約束的に出来上つた象徴に過ぎないとも考へられる。」「芸術は自己の表現だ、といふ根本主義から言へば、其約束的象徴は、我が見る自然に何等の権威をも齎らさない」とし、「若し大自然の現はれを主としていふならば、万有はそれ自身悉く季題なのだ。季題たり得ない万有が、この地球上に存在するとは思はれない。」と述べ、我と自我との交渉を説き、「万有は季題である」としている。

そこで、本稿では「無中心論」を唱えた碧梧桐が、どのような過程を経て、「万有季題論」に至りついたかを具体的に考察を進めたいと思う。

先ず、四十三年末の「無中心論」を支えていた碧梧桐の季題観はどのようなものであったかを眺めてみたい。

四十二年十一月、碧梧桐は「続一日一信」の中で、次のような記事を見せている。すなわち、碧梧桐が選した中塚一碧楼の句に対して、同人の間から出た「季題趣味との交渉が漠然としてをる、」という批判に答え、「季題趣味の交渉といふことは」「俳句の依て立つ根本義であるけれども、季題趣味其の物が、時勢と共に移動しつゝある」。したがって「従来養はれたゞけの感じで速断の出来ぬ場合のあることを顧みねばならぬ。」とし、季題趣味の移動ということは、「其の移動する当時はたゞ隠約の間に在つて、いつ何処に萌芽するかは計られぬ」が「其の機微の発動を識認するのが、選者としての活眼といふべき」で「予の選する一碧楼の句」に「因はれざる或る新趣味との交渉を認識するとも云ひ得る」と述べ、「たゞ自己の経験と合致せぬといふ点で、漫然と季題趣味没交渉を云為する説には与みし難い。」（「続一日一信」明42・11・20記事、日本及日本人、明43・1・1日）と、季題趣味は移動するものであり、それを見出すのが選者の活眼であると説いている。

さらに、翌年七月には、「我々の新傾向に対する主張も二年以来多少の小変化をしてをる。」とし、新俳句時代とその季題趣味において、特に「躍進的感じの推移」があるとし、芭蕉は「従来の滑稽俳句から脱して、始めて真の趣味的俳句を築き上げた」のであるが、「季題に関する観察が前習慣と一致せぬ為め、其の説明には多大の

る場合が絶無であるとは言へぬ。」と説き、この「雨の花野」の句によって「所謂中心点に拘泥しない、他の写生の意義を貫徹した興味が」「闡明さるゝものと見ることは出来ぬであらうか。」と説くのである。そして、中心点を捨て、想化を無視するということは、「多くの習慣性に馴れた人々に破壊的であると考へらるゝ。」が、その破壊的であると考えられる処に、「新たなる生命の存することを思はねばならぬ。」とし、「中心点を捨て、想化を無視するということは、可及的人為的方則を忘れて、自然の現象其のまゝの物に接近するの言ひ」であり、「偽らざる自然に興味を見出す新たなる態度である。」と説く。

そして、最後に、「今日まで称道し来つた新傾向論は、外廓的抽象的論に過ぎなかつたやうに思ふ。かくすれば新傾向句が出来るといふ具象的の方法は漠として捕捉し難いものであつた。が、今日始めて或る内容上の目標を得て、新傾向の一帰著点を得た如く感じてをる。」と述べるのである。

この碧梧桐の論は、要するに、出来事をそのままに取り出している点に興味を感じ、それを季題趣味とかかわらせることによって真の写生のあり方を見出し、先人より踏襲した習慣を離れるところに新たなる生命がひそんでいることを述べたものである。

ところで、碧梧桐は、大正五年に「万有は季題」「であらねばならぬ。」(「徹底せざる俳句観」海紅　大5・3)という考えに至りついている。そして、これを箇条書きして次のように説明する。すなわち

一、「我のない所に万有は存在しない。といふことは反対に、我あつて始めて万有の実在を認識することになる。」「四季の変化によつて生ずる実在の更に種々の現はれ」「其運動、旋律等を享有する、それが季題観念の根柢である。」

一、「四季の変化は、地球の他転自転に原因するのであるから、実在の万有は其変化を経由せぬことは事実に於て有り得ない。」「この意味に於て、万有は季題」「であらねばならぬ。」

一、「我れの認識は無制限に自由である。」「この意味に於て、季題は人によつて相違し、同じ人でも時によつて相違すべきである。即ち季題は個々別々である。」

一、「人間の官能には限りがある。」「本来開放されたる季題たる万有と、各人個々別々の季題観とに、共通非共通の自然淘汰が行はれて来る。」「即ち実在の認識と其感激との程度標準が示されて来る。」

一、「季感を総ての実在から直覚して、其処に詩的感激を発してゐるのが、俳人の季題感である。」

一、「季題観を離れて俳句は存在しないのである。」

一、「無季の句を要求するとか、実在の現象は必ず季感を伴なうものでない、といふ如きは」「自己を詐はつた態度に起因するか又は本来開放された季題観の根本に還元しようとする理知の運動に過ぎない。」

というもので、「要するに、季題観は、我と実在との交渉する所に生れる季感の醇成されたもの」と説くのである。

この万有季題論の先がけとしての論は、すでに、大正三年に示さ

碧俳論にみる自我の覚醒

――「無中心論」と「万有季題論」――

栗田　靖

1

河東碧梧桐を中心とする新傾向が、最も華かに活動を示したのは、碧梧桐が、『日本俳句鈔第二集』の序で「其波瀾の頂点とも目すべき時機を捕へると、略ぼ之を二期に分つことが出来る。一は四十二年の冬の城ノ崎時代、他は四十三年の冬の玉島時代である。一は洶湧常なき日本海の荒浪に触れてをり、他は澄静湛然たる瀬戸内海の小春凪に親しんでをる。」と述べているように、明治四十二・三年にわたるそれであろう。中でも、四十三年冬の玉島俳三昧では、碧梧桐の無中心論が議論せられた時代である。

この無中心論を具体的に紹介してみると、明治四十三年十一月十四日、碧梧桐が、旅中の俳信「続一日一信」の中で、

雨の花野来しが母屋に長居せり　響也

の句を読んだ時の感想として「雨中の花野を通つて来て、離れの我家に帰るべきものが、母屋に立寄つて長居をした」という「事実」、すなわち、一日の出来事の或る部分を取り出して、それを偽らずに叙したという所に興味を感じるもので、「日記中の一節とさまで差異のない出来事が、花野といふ季題趣味を得て、興味を形づくつてをる所を新しい」とする考えを示したものである。

つまり、碧梧桐は「温かいとか、冷たいとか、大きいとか、雄壮だとかいふ風に感じを一点に集めるのが、従来の句作の傾向であり、その「感じを一点に纏める」、言葉をかえて言えば、「何人にも普遍的に明瞭な限定した解釈が出来るやうにする」ということを従来「句に中心点がある」といっていたが「若し中心点といふことを、明瞭な限定した詞で現はされるものに限るとするならば」この花野の句には「中心点といふものがない。」と説き、さらに、一般的には「雑駁な自然から純粋な美を求める手段」を「想化」といっているが、狭義にいう「想化」は、「先人より踏襲した習慣に適合する場合」をさす。したがって、もし「狭義の意味を想化の全体」とすれば、この句には「所謂想化といふ手段」が「殆んど無視されてをるといふてよい。」とし、われわれが、いわゆる明瞭な中心点を作ろうとすれば、「等しく写生から出発して往つても、其中心点の為めに自然の現象を犠牲に供せねばならぬ場合がある。」「即ち名義は写生であつても、中心点の束縛の為めに、写生の意義を没却す